

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Reciprocal teacher development based on
collaboration between local high school and
university

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 和宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/434

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



高大連携を活用した互恵的教員養成の試み¹

野村和宏

キーワード：教員養成，高大連携，自律的成長，英語教育法，授業見学

1. はじめに

日本の公教育の中でさまざまな変遷を経て、英語が中学校・高校で原則的に必修となり小学校でも英語活動が始まった。2008年から2009年の中学校・高校の英語科学習指導要領の改訂では教室現場そのものを英語コミュニケーションの場とするという方向が明確に示されている。とりわけ高校では英語の授業は英語で行うという点に注目が集まったが、こうした流れの中で運用能力や指導力に優れた英語教員への期待はますます高まっている。筆者は教員養成のための「英語教育法」を担当している。この「英語教育法」は学生が将来、英語の教師として必要とされる英語教育の理論的知識と実践的指導力を身につけることを目標としている。理論面では英語教育に関わる要素や各技能の指導法などについて学び、実践面では教材研究、教案作成、授業展開の方法を模擬授業演習の中で体験する。模擬授業は録画し学生はDVDで自分の姿を観察する。授業中の議論や相互評価を通して発表力を養い、総体として教育力の向上をめざしている。

この授業を履修する学生たちの学びを実質的により意味のあるものとするため2007年度からは毎年、近隣の中学や高校の協力を得て学生たちが学校現

1 本論文は大学英語教育学会（JACET）2010年度全国研究大会（宮城大学）で口頭発表したものに加筆修正を加えたものである。貴重なコメントを寄せてくださった先生方に感謝する。

場の生の授業を参観できる機会を設けている。本小論では、この授業見学が英語教育を学ぶ学生に有益であっただけでなく、授業を行った高校の教員にとっても意味のある実践となったことを報告し、こうした授業見学のもたらす教育的可能性について論じる。

2. 「英語教育法」授業概要

筆者の担当する英語教育法の授業は年度によりトピックの設定や順序に若干の違いはあるものの、基本的には2004年度から2010年度にわたり毎年ほぼ同じ構成をとっている。2009年度の授業内容は表1のようなものであった。

表1 年間の授業シラバス

前 期	
第1回	授業の導入, 教科書序章, 英語教員をめざすにあたり
第2回	日本の英語教育の歴史
第3回	学習指導要領
第4回	英語教授法
第5回	英語教員の役割と要件, 学習者論
第6回	第一言語習得と第二言語習得
第7回	コミュニケーション能力, 国際理解教育
第8回	発音指導
第9回	リスニング指導
第10回	スピーキング指導
第11回	リーディング指導
第12回	ライティング指導
第13回	語彙指導
第14回	辞書指導
第15回	ティーム・ティーチング
後 期	
第1回	後期授業開始にあたり
第2回	文法指導
第3回	中学校での指導, 高等学校での指導
第4回	教育実習
第5回	授業指導案(教案)の書き方
第6回	模擬授業演習-1 (4人)
第7回	模擬授業演習-2 (4人)
第8回	高校授業見学
第9回	模擬授業演習-3 (4人)
第10回	模擬授業演習-4 (4人)
第11回	模擬授業演習-5 (4人)
第12回	模擬授業演習-6 (4人)
第13回	模擬授業演習から何を学んだか
第14回	一年間の授業のまとめ, 今後の課題
第15回	—

教科書として JACET 教育問題研究会編『新英語科教育の基礎と実践—授業力のさらなる向上を目指して』（三修社）を用いている。学生には授業シラバスにより上記の前期、後期の授業内容の概要をあらかじめ示している。学生は授業に向けてこれらのトピックに関わる教科書の章を事前に読んで準備してくることが求められる。授業ではそのテーマについて教師側から質問を投げかけ、学生がペアあるいはグループでディスカッションをして、最後にそれをまとめていくというスタイル²で進める。教科書以外にも参考となる資料、音声教材、映像教材などを組み合わせていく。学生によるディスカッションはトピックによっては日本語で行うこともあるが、授業全体は基本的に英語で進めており、学生が授業の中で同時に英語運用能力も高めることを目指している。前期、後期の筆記試験は行わず代わりにレポート試験とした。前期は授業で取り上げたテーマの中から一つを選び、さらに各自で資料を集めて自分の論をまとめ、後期は「英語教員を目指す自分の課題」と題したレポートを課した。

3. 授業見学実施

表 1 に示した年間の流れを見ると、理論を学んできた学生が後期になってから模擬授業に取り組むことが分かる。知識として学んだものを模擬授業の中で実際に試してみるわけだが、Hill & Dobbyn (1979: 12) が “For many trainees it is a great strain just to have stood up for the first time in front of a class.” と述べているように、多くの人の前で初めて授業を行うことは大きな緊張を伴う。

2 Wright (2005: 125) は classroom management を order (high structure) と opportunity (low structure) という観点から論じ、“A more opportunity-oriented classroom management strategy is likely to prove more risky for teachers and learners, particularly if they are accustomed to an order regime.” と述べている。学生主体の活動に慣れていない学習者に積極的に質問を投げかけグループワークをさせることは、教師にとっても予測のつかない解答や反応に対する指導など新たな負荷がかかることもある。しかし学生は受身ではなく自らが授業に関わっていくことが求められるため、積極的な授業参加姿勢が育つことが期待される。

こうした学生たちの不安を少しでも解消し、授業というものについて具体的なイメージを得るために、またそれまでに学んだ理論的要素がいかに展開されているかを知るために現場の中学・高校で実際に日常行われている授業を見学する機会³を計画した。しかし教育実習のようにあらかじめ設定された期間以外の授業見学は、確立された既定の手続きがないため念入りの準備が必要となる。2007年度と2008年度は神戸市教育委員会に高校、中学校へ授業見学の可能性について打診し、働きかけを依頼して慎重に準備を進め、当該校英語科の先生方の協力を得た。

表2 年度による授業見学の実施

2007年度	11月	A 高校 (大学から電車徒歩30分)	5時間目3クラス, 6時間目3クラス	25名参加
2008年度	7月	B 中学校 (大学から徒歩7分)	5時間目3クラス	39名参加
	11月	A 高校 (大学から電車徒歩30分)	5時間目3クラス, 6時間目6クラス	37名参加
2009年度	11月	C 高校 (大学から電車徒歩15分)	5時間目4クラス, 6時間目3クラス	30名参加
2010年度	10月	C 高校 (大学から電車徒歩15分)	5時間目6クラス, 6時間目5クラス	32名参加

2007年度、2008年度の2年間の実績の中で築いた先生方とのネットワークを生かし、2009年度、2010年度は年度当初から当該校の英語科主任教諭と綿密な打ち合わせを進め、学校側の全面的な協力を得ることができた。また本学と神戸市教育委員会が2008年に締結した「公立大学法人神戸市外国語大学と神戸市教育委員会との連携教育に関するアクションプラン⁴」における取組みの一つとの位置づけることもできた。授業見学の時期は高校側の中間試験日程と大学側の英語教育法の中での模擬授業実施時期とを考慮に入れて調整を行い決定した。

3 Davis & Moely (2007: 283-284) は新任として着任する教員も現場で大きな Culture Shock を受けストレスで落ちこむことが多いため、pre-service teachers に学校現場体験を与えることの重要性を指摘している。

4 アクションプランは2008年の協定書締結に続き、2009年度に双方の構成員によるワーキングを経て設定されたものである。2010年度から基本的に5年間の実施となる。4つの基本的な事業体系の中に15の具体的なアクションプランが設けられ、今回の授業見学は「外大生の教育実習・授業見学等の積極的受け入れ」と「教職課程科目における連携」に相当する。アクションプランの詳細については <http://www.kobe-cufs.ac.jp/news/files/action%20plan.pdf> を参照。

大学での筆者担当の英語教育法の授業は木曜日第3限（12：45～14：15）であり、高校側の5時間目（13：10～14：00）をうまく取り込む時間帯となる。通常の学期中に高校を訪ねるということから、学生には教育実習や学校インターンシップに順ずる服装やマナー等の注意を十分に行った。当日、学生は13時に高校の大会議室に集合してから希望のクラスを見学した。授業時間の途中で別のクラスへ移動することも許可されたため、ほとんどの学生が5時間目に2つの授業を見学し、さらに続く6時間目の時間帯にも高校に残ることができる学生は引き続き授業見学を行った。具体的には2009年度は新設校である神戸市立須磨翔風高校⁵で次の英語科目の見学をする機会を得た。

表3 2009年度に見学した授業

5時間目 13：10～14：00

時 限	授 業	担 当 者	教 室
5限	神戸西高校 人文 Reading	H. M. 先生	HR（3-3教室）
5限	須磨翔風高校 英語 I（ハイクラス）	T. I. 先生	HR（1-5教室）
5限	須磨翔風高校 英語 I（Standard）	H. Y. 先生	HR（1-6教室）
5限	須磨翔風高校 英語 I（Standard）	Y. H. 先生	小講義室⑧

6時間目 14：10～15：00

6限	須磨翔風高校 英語 I（ハイクラス）	T. I. 先生	HR（1-7教室）
6限	須磨翔風高校 英語 I（Standard）	C. M. 先生	HR（1-8教室）
6限	須磨翔風高校 英語 I（Standard）	Y. H. 先生	小講義室⑨

学生は自分たちが高校生だったときとは違い、教師を志望する学生のみで生の授業を観察できる絶好の機会となった。それぞれの先生方の指導、生徒の反応など授業の展開をじっくりと観察し、自分の模擬授業実践へのヒントを得た。⁶

5 神戸西高校と須磨高校が再編されて移転し2009年度新入生から新設の須磨翔風高校となった。2009年度は神戸西高校と須磨高校の2年生、3年生は同じ敷地内で学んだ。

6 太田（2008：188）も、授業参観から授業実践へつなぐためには「自分の授業に生かす」という意識を持ちながら参観することであり、いい授業でしただけでは自分の授業実践につながらないと述べている。



写真1 授業見学を行う学生の様子

授業後は自分が参観した授業について、指導のねらい、生徒の学習、授業の進め方など気づいたことについて1つの授業につきA4で1枚のレポートを、2つの授業を見学した場合は2枚のレポートを書くようにさせた。5限、6限両方で4つ見学した場合は4枚となる。これを翌週の授業時に集め、コピーして高校の先生方に届けた。30人の参加者によるレポートは合計71枚となった。

4. 学生の学び

4.1. 新しい視点の獲得

表1から分かるように2009年度は後期授業の第6回目から既に模擬授業を開始しており、高校の授業見学は授業の第8回目であったため、学生たちの模擬授業期間に食い込む形となった。既に模擬授業を終えた学生は自分の取組みと比較しながらの授業見学となり、またその後で模擬授業が予定されていた学生は自分の授業の中に生かすことができるようにするため、それぞれ真剣な観察となった。

図1で示したのは生徒としての立場で授業を受ける場合の視点である。教

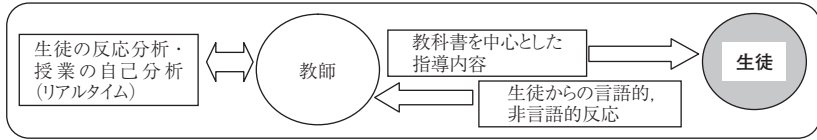


図1 生徒としての授業への視点

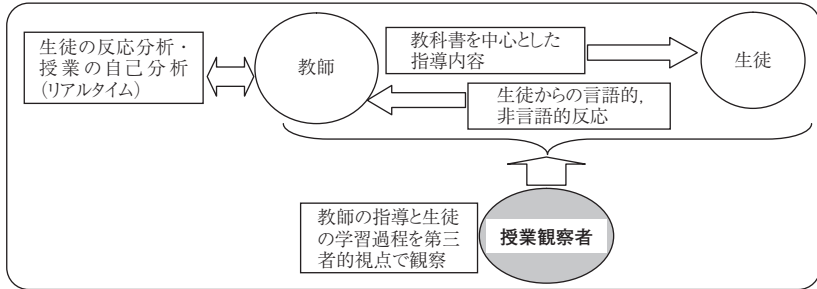


図2 授業観察者としての授業への視点

師の指導に対し、生徒は教師に対して何らかの反応を示す。こうした授業の流れを教師はリアルタイムで観察・分析し、授業の成否を判断する。

それに対して次の図2では学生が生徒としての立場ではなく、授業観察者としての立場で教室の中で起こっている指導と学習の過程を第三者的視点で客観的に観察する様子を示している。同じ教室という授業空間に位置してもこの視点の違いは大きく、教師と生徒の間で展開される授業中のさまざまな活動のもつ意味を学んでいくことができる⁷。

4.2. 観察を通じた気づき

学生によるレポートにはさまざまな気づきが見られた。優れた授業の進め方に関するコメントが多かったが、それ以外にも教師と生徒のやりとりのもつ意味に触れたもの、生徒の行動に対する教師の対応に疑問を投げかけるも

7 八田（2000：101）が指摘しているように、教師の日常的な教育活動や学習形態は1回だけの観察（ワンショット）では十分把握できず、その授業の決定的な判断はできないという限界が存在するのも事実である。



写真2 観察を通した気づきを書き留める学生

の、教室の環境についてなど多岐に渡るものであった。主なコメントをそれぞれの授業ごとに以下に示す。

表4 それぞれの授業に対する学生の主な観察意見

H. M. 先生

01	グループのメンバーが答えたらグループ全員が座るなど競争の要素があった。
02	生徒がどんどん挙手をしているのが印象的だった。
03	挙手した生徒の順番をよく見ていて不公平のないようにしていた。
04	自主的に挙手をしない生徒は先生の方から指名していることが分かった。
05	グループワークの間は私語の多いグループも見られた。
06	クラスの雰囲気が明るい元気すぎてざわざわしているグループもある。
07	授業内容によって個別学習とグループワークを分ける方がよいのではないかと感じた。
08	先生が元気で声が大きく教室のすみずみまで十分に聞こえていた。
09	生徒が分かりにくそうにしているときにうまくヒントを与えていた。
10	予習プリントにさまざまな工夫と配慮がなされていて感心した。
11	教室内をよく動き回って生徒の様子を観察していた。
12	ディクテーションはもう少し負荷のかかるものの方が効果があるのではないかと感じた。
13	生徒が積極的に自分から発表できる雰囲気作りは本当に大事だと感じた。
14	クラスの人数が多く意欲を持たない生徒へのアプローチが難しいと感じた。
15	班ごとに読ませてストップウォッチで時間を計っていたが意図が分からなかった。
16	教師という仕事は生徒の理解のために努力することだと感じた。
17	生徒が机の上に全く辞書を出していないのに驚いた。
18	文法説明に入ると集中力が欠け、半分以上の生徒が私語や他のことをしていた。
19	教室の後ろから授業全体を客観的に見学するのはとてもよい勉強になった。
20	生徒が積極的に取り組むのはやはり教師の熱意のお陰だろうと感じた。
21	英語で指示が出されることがほとんどなかったのが気になった。

T. I. 先生

-
- 22 生徒の様子を見ていると先生の早い英語もほぼ理解しているように見受けられる。
23 授業の全てをほぼ英語でしているのはすごいが、理解できていない生徒もいる。
24 生徒のレベルによっては全て英語による授業は難しいのではない。
25 授業中の先生の英語の使用量の多さとスピーディーな授業展開が印象に残った。
26 授業進行のテンポがよく生徒に私語をするスキを与えなかった。
27 クラスルームイングリッシュがかなり多く用いられている。
28 学習指導要領で示された英語で行う授業のあるべき姿を見たように思う。
29 先生の英語の質問に生徒も英語で大きな声で答えていて驚いた。
30 先生が生徒の緊張感を切らさないように適切に指名しているのに感心した。
31 英語の発音がとてもよく、きっと生徒からも尊敬されているのだろうと思った。
32 黒板の書き方が非常に見やすかった。
33 黒板のチョークの色の使い方が工夫されていて一見して理解しやすい。
34 授業のために用意されているプリントにさまざまな工夫がある。
35 英語での質問やプリントなどに生徒が考える場面が多く用意されていた。
36 できた生徒のほめ方やできない生徒への励ましなど、生徒のやる気を高めていた。
37 生徒が答えた後には必ずほめることが生徒に英語を使わせるコツだと感じた。
38 生徒をほめる際の英語にさまざまなバラエティがあった。
39 先生と生徒の間により緊張感や心地よい距離が感じられた。
40 内容理解になると生徒は能動的でなく挙手もあまりなく主体性が感じられなかった。
41 正誤問題の説明で間違っただけの選択肢がなぜ違うのかの説明をきちんとしていた。
42 ヒントの出し方も段階的に答えを引き出すようにうまく工夫されていた。
43 机間巡視により居眠りをしている生徒もすぐにさりげなく注意できていた。
44 余裕のある授業を行うために十分な教材研究と教材作りが大切であると分かった。
45 授業の準備に多くの時間をかけているのが分かった。
46 生徒の知識を使わせることで「使える知識」に変えていく授業展開だった。
47 今の英語教育で先生に求められている資質について考えるよいきっかけとなった。
48 さまざまなところで経験を積み重ねたからこそできる工夫や実践があった。
49 先生がオリジナリティを持ちクラスの雰囲気によって使い分けていた。
-

H. Y. 先生

-
- 50 本文の説明を教科書も見ないで生徒に目を向けて話し続けたのは驚いた。
51 生徒の状況を常に把握した適切な声かけがあり、生徒も先生を慕っている。
52 生徒のレベルに合わせた丁寧な説明がなされていた。
53 生徒の質問に対する対応や授業展開の絶妙な「間」に感心した。
54 生徒が分からなければすぐに質問できるともよい雰囲気があった。
55 黒板の単語カードはフラッシュカードとしても使えるように工夫されていた。
56 フラッシュカードはカラフルで見やすく作られていた。
57 手製のフラッシュカードにはさまざまな工夫があり、目からうろこだった。
58 大事なところにマークする方法などを具体的に分かりやすく説明していた。
59 厳しさと面白さと両方あって生徒へも目が行き届いていた。
60 少々ふざけ気味な生徒を適当にかわしながら無視はせず、冗談で対応していた。
61 授業に集中できていない生徒を後ろの席に移動させたのは気になった。
62 注意されても私語をやめない生徒を見て、注意するのは大変だと実感した。
63 授業を妨げる生徒がいたら自分だったらどう対応するか考えさせられた。
64 授業の予習ノートがきちんとできていない生徒が多いようだった。
65 授業最後の挨拶がなかったため、休み時間とのけじめがつかないようだった。
-

Y. H. 先生

- 66 先生の声が大きいことがとても重要なことだと感じた。
67 授業が段階をふんで学習できるように工夫されている。
68 マグネットのついた単語カードを準備して見やすく、書く時間も節約できた。
69 先生のノートにギッシリ書き込みがあり、しっかり準備されていることが分かった。
70 教えることに対して余裕を感じさせた。
71 手を上げて答えた生徒にシールを渡していくので生徒も熱心だった。
72 答えた生徒にシールを渡していたが、どういう意味があるのか分からなかった。
73 生徒の指名はランダムに行われており、生徒が緊張感をもって授業を受けていた。
74 説明の間も常に生徒の机の間を歩き回りながら、生徒の理解をチェックしていた。
75 答え合わせのとき机間巡視して答えが分かっている生徒を指名しているようだ。
76 指名された生徒が答えるまでにどれだけ待つか、絶妙な時間配分があった。
77 寝ている生徒やあまり参加していない生徒へは近づいていって促していた。
78 常に生徒の取り組みを把握し、生徒の気持ちを考えた授業に感心した。
79 発音がとてもきれいで生徒のモチベーションが高まると思う。
80 英語で授業をしているという印象はあまり受けなかった。
81 チャイムが鳴ってすぐ次の授業の課題を指示したのはちゃんとした計画のお陰だ。
82 教室の窓が開いていて少し寒かったので生徒は大丈夫か心配になった。

C. M. 先生

- 83 板書がとてもきれいで矢印や色も使ってとても分かりやすかった。
84 先生の指導案のコピーを配布してもらってとても参考になった。
85 ていねいな解説で生徒から答えを引き出していく授業展開は生徒が参加しやすい。
86 授業の明確な目標が設定されていて、順序だてられたお手本となる授業だった。

これらのコメントから学生が授業の展開・進行を綿密に観察し、それらの意味を読み取ろうとしていることが分かる。生徒の指名の仕方については、「生徒が挙手」(2)「ランダムに指名」(03) (30) (73)「挙手しない生徒を指名」(04)「正解が分かっている生徒を確認して指名」(75)などのパターンを見出している。机間巡視は「生徒の様子を把握する」(11) (74)「寝ている生徒に注意を促す」(43)効果があるとしている。教材研究を十分に行い授業準備やプリント作成をし授業展開を頭に入れて余裕をもって授業をしているという観察は(09) (10) (34) (35) (41) (44) (45) (46) (50) (55) (56) (57) (67) (68) (69) (70) (81) (84) (85) (86)に見られる。英語の教員として大切な英語の発音や声の出し方については(08) (31) (66) (79)に、黒板の使い方、板書については(32) (33) (83)に、また教師という職業の使命感や資質、姿勢に関わるコメントとして(16) (20) (47) (48) (49)などがある。学習指導要領の改訂で話題となった「英語で授業を行う」とい

う点については担当教員によって英語を使う量や授業スタイルが異なったため、(21) (22) (23) (24) (25) (27) (28) (29) (80) のようにさまざまな意見が見られた。生徒を積極的に授業に取り組みさせるために (01) (26) (36) (37) (38) (39) (71) のようにそれぞれの先生がさまざまな方法を工夫していることが分かる。生徒の理解力に応じた指導は (42) (51) (52) (53) (54) (58) (59) (67) (76) などで指摘されている。活発な授業展開の一方、授業に集中できない生徒や妨げとなる生徒の存在やその対応については (14) (18) (40) (60) (61) (62) (63) (77) (78) で、その状況を見た学生たちは自分が教師の立場であればどのように対応するかという問いかけを自らにしている。授業で行われた活動についてその意図が分からないというコメントも (15) や (72) に見られた。また教室の後ろから授業全体を観察することで勉強になったという (19) のコメントもある。授業についての問題提起もいくつかある。(05) (06) (07) はグループワークの効果について、(12) はディクテーションの難易度について、(17) は辞書について、(64) は予習の確認について、(65) は授業と休み時間のけじめについてなどである。さらに教室環境について (82) のような意見もあった。

ここには図2で示したように教員を目指す学生の授業観察者としての真剣な学びがある。実際に教育実習に行った学生が指導担当教員や他の教員の授業参観を行うことで同様の視点を得ることが期待できるが、この授業観察の意義は学生が教育実習に行く前年または前々年に、大学で座学として英語教育法を学ぶ中で起こったということである。この授業見学が学生たちの模擬授業にどのような影響を及ぼしたかについて論じる紙数の余裕がないが、模擬授業に教師として取り組む学生も学生役として取り組む学生もどちらにも積極的な姿勢が見られたこと、分かりやすいフラッシュカードなど先生方が使っておられた指導技術を明らかに自分でも試してみようとする授業計画や

8 八田(2000:12-14)は教育実習が始まる数日前に実習校を訪問し授業観察をした学生の例を報告し、その学生が観察を通して中学、高校の授業に対する漠然とした先入観が誤っていることに気づいたことが意義深いことであると述べている。

展開があったことを記しておきたい。

5. 教員の学び

5.1. 成長への方策

教員の使命は学習者の能力を開発し育てることであり、教育の場は教師と学習者との人間的な営みである。教室で起こっていることを実り多いものとするため、教師には継続的に成長を目指す姿勢が求められる。教師がプロの教員としての自覚を持ち成長を目指すとき、まず現在の知識、技術、態度・姿勢を知り、自らの課題を設定する必要がある。そして実際に行っている授業がどのようなものか分析するために授業観察を行うことになる。授業観察は教師を指導する立場にある者が授業を訪問し助言を行うことが多いが、これについて Williams (1989: 85) はチェックリストに基づき指導者が授業者に対して良い、悪いという評価を行う授業観察は、とりわけ授業者に対して多くのストレスを与えるものであり、得るところがあるとしても最善の授業観察方法であるかどうかを考えるべきであると述べている。

このような指導者による訪問を通して詳細に評価を受ける方法とは異なり、授業者自らが分析し振り返るという分析手法がある。これは Richards & Farrell (2005: 34-50) が Self-monitoring として一章を割いて詳細に論じている方法で、教師のより自律的な成長のために有効である。同じく Richards & Farrell (2005: 48) はビデオ撮影により Self-monitoring を行うことについて “Although teachers are sometimes skeptical at first about the benefits of self-monitoring, few remain so after experiencing it and generally feel it was well worth the effort.” とその成果を述べている⁹。また外部の指導者ではなく同僚で相互に観察、助言を行う方法や組織としてま

9 教員や学生が自分の授業や発表を自ら映像を通して観察し、そこからどのように学び成長していくかについて詳しくは、野村 (2008) 参照。

10 立田、今西 (2010: 45-46) では求められる教師像の中に「教員同士の協力」の項目を立て、専門的協力の一つとして「他の教員の授業を参観し、フィードバックを行う」をあげている。

とまったFD (Faculty Development) 活動の一環として行う場合もある。これら個人でできること、同僚やグループで行うこと、組織として取り組むことについて Richards & Farrell (2005:14) は表5のようにまとめている。

表5 Activities for Teacher Development

Individual	One-to-one	Group-based	Institutional
<ul style="list-style-type: none"> ・ Self-monitoring ・ Journal writing ・ Critical incidents ・ Teaching portfolios ・ Action research 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Peer coaching ・ Peer observation ・ Critical friendships ・ Action research ・ Critical incidents ・ Team teaching 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Case studies ・ Action research ・ Journal writing ・ Teacher support groups 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Workshops ・ Action research ・ Teacher support groups

5. 2. 同僚支援グループの意味

Johnson, et al. (1991 : 116-117) は、教育の成否は教員が教育的能力を高めることに肉体的・精神的エネルギーをどれだけ投入するかにかかっており、それはどれだけ同僚から支援を得られるかに左右されると述べている。しかしそのような支援は一般的にはなかなか受けることができず、教員は孤立し、焦燥感や疎外感をもつことになるとも述べている。このような状況で Johnson et al. が指摘しているのがいわゆる同僚支援グループの存在の意味である。望んでメンバーとなる数名の教員によって構成され、相互に支援、思いやり、関心、笑い、仲間意識、賞賛があるグループであれば教育の効果が高まるとしている。このグループで行う取組みの一つに相互に授業を参観しフィードバックをしあうということがある。Johnson et al. (1991 : 118-119) は、この際にメンバーの教育経験や個性の違いに関わらず相互に学ぶことができるという意識を持つこと、授業がうまくいくときもそうでないときもあると認識すること、フィードバックは実際に教室で起こったことについて行うこと、などの注意を示している。

このような相互理解に基づく同僚による授業参観やフィードバックは、前

述の外部の参観者による一方向的、権威的立場からのフィードバックよりも受け入れやすいのは当然である。そこにはお互いに心を開いた仲間同士の成長へ向けた学びの姿勢が存在するからである。

5. 3. 学生による授業見学が授業者に対して意味するもの

今回の学生による授業見学とそのレポートによるフィードバックは授業を公開した側の教員にどのような意味を持っていたのだろうか。筆者の当初の狙いは主に学生が現場の教室の様子を知ることであり、全部のレポートにコメントを記入して学生に返却し、授業の素材としても活用した。つまり大学側・学生側の得るものがはるかに大きいという状況を想定していた¹¹。

これらのレポートは冊子に製本して授業を担当された先生方に届けた。その結果、学生による授業観察レポートに対して授業を担当した教師からさまざまな反応が寄せられた。一部を紹介する。

(1) 本日、英語授業見学のレポート冊子を頂戴いたしました。郵便物がメール箱に入っていて中を開けてみるとびっくりしました。本校での英語授業見学レポートが冊子になっていたことに驚きの一言でした。このような形で、授業をされた先生方個別の冊子と全体を集約された回覧用の冊子を別々にご用意していただきましたことに、心より深謝申し上げます。周りを気にせず、その場で思わず、「凄い」という大きな声が自分の口から出ていました。

(2) 早速、関係の先生方の手元に配らせていただきました。どの先生方も驚きの様子と笑顔に満ち溢れていました。……先生も満面の笑みを浮かべて「ありがとうございます」と言っておられました。

(3) 私も、早速自分の授業に関する学生さんたちの感想を読ませていただきました。自分では、緊張していたことに加えて、単調な授業になってしまったことを反省していたのですが、あのようなお褒めの感想を沢山いただいて嬉しい反面、恥ずかしさも残っています。将来教師を目指しておられる学生さんたちの真剣さと熱意が伝わってきました。

(4) やはり、授業を観察する鋭い観点がしっかりと身についていると実感いたしました。短時間しか見られていないのに、あれだけの感想を書けるということに驚きを感じました。現場で実際に教壇に立っておられる先生方の口からであってもなかなか聞けない貴重な感想が一杯詰まっている素晴らしい冊子です。

11 河上他編（2009：70）で示されているように、高大連携のいわゆる「ミニ利益相反」という問題が潜在的にあったが、ここでは結果的に両者にとって益するところの多い連携となった。

(5) 今回の授業を見学していただき、学生さんたちが得たこと以上に我々教師がこの冊子から学ぶことが多いと思います。このような冊子という形で大学教育実践の積み重ねの証を残されておられることに先生の英語教育に対する情熱と直向さをどの先生方も肌で感じておられることと思います。ご多忙の中、貴重なお時間を割いて、このような素晴らしい冊子までお送りいただき、誠にありがとうございます。私の宝物の一つとして大切にし、何度も拝読させていただきます。

(6) 授業そのものを見学すること、特に他の教科の授業見学はなかなか実現しないものです。どの教科も、裸になって素直に自分を認め合い、共同体としてどのような同一方向へ進むべきかをこれから真剣に討議していく必要があると痛切に感じています。毎週月曜日の1限目にALTも含めた英語科教員の打ち合わせ時間を必ず持って、色々な問題を討議しているのは、英語科だけです。今回のような授業見学の企画は、高大連携の益々の発展のためにも是非とも継続したいと思っていますし、本校の将来のためにも欠かせない毎年の学校行事に位置付けていかなければならないと真剣に考えております。

たとえ教員をめざして学んでいる学生からであっても、自分の授業に対して細かくコメントを書かれることに抵抗のあることが容易に想像できる中、上記のような感想が届けられたのである。先生方が学生たちの存在をあたかも前述の同僚支援グループの一員として受け止め、そのコメントから学ぶ姿勢を示されたことに驚きと感動を覚えた。また学生たちもいかに現場の教師が自らの成長に真剣であるかを実感することとなった。表5の One-to-one に示された peer observation が大規模に行われた形となった。こうした高い意識が見られるのは同校英語科主任のリーダーシップの元、英語科教員全員が日常的に授業について話しあい、授業案や指導法、教材を協力して

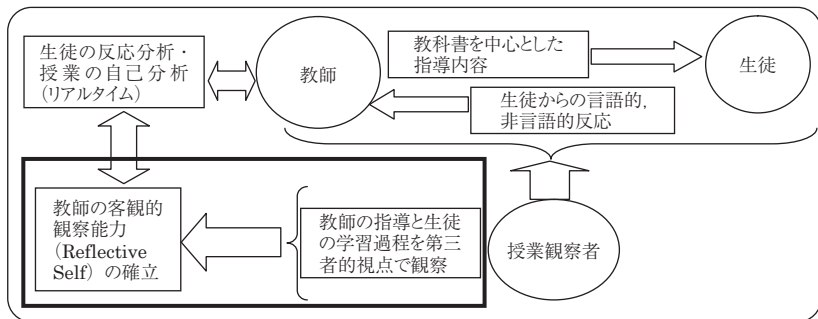


図3 授業観察者の視点と教師の Reflective Self の確立

設計し、相互に参観するということを実現しているためである。まさに理想的な同僚支援グループの存在がこのような反応を引き出したといえる。

図3に太枠で示したように授業観察者からのフィードバックが教師自らの Self-monitoring と共に相まって Reflective Self を高めることにつながっていったと考えられることが今回の授業見学のもう一つの大きな収穫である。

6. よりよい教員養成を目指して

学生はこの授業見学後も大学の授業の中で全員が順番に模擬授業を体験した。教材を自分で選び授業を設計し詳しい教案を用意して授業に臨んだ。他の学生が生徒役として授業を受け、評価表を用いて授業に対する評価と議論を行い、さらに授業担当学生は後日、自分の授業を DVD の映像で観察してレポートを書くというプロセスを経た。こうした授業展開の方法については野村（2007：190-191）に詳しく報告したが¹²、2009年度の模擬授業練習に対する学生の取組みには従来以上に積極的で真剣な姿勢が観察された。これも前述の高校授業見学の成果としてとらえることができる。

授業見学レポートは筆者がコメントを記入して授業で返却し、それに基づき授業でディスカッションを行った。その際に教科書第4章「英語教員の役割と要件」の内容を元にして作成した33項目のチェックリスト¹³を用い、学生は自らの現時点での資質や教員をめざす者としての姿勢を確認した。項目(01)から(06)の性格や意欲は全体として高い評価であったが、具体的な英語力・指導力に関わる項目についてはまだまだ不十分であると自己評価し

12 実際の授業映像も同書添付の DVD に収録している。

13 このリストは Appendix 参照。なお JACET 教育問題研究会（2010）科研報告書では、言語教育に携わる教員養成課程履修学生の成長を促すために開発されたリフレクションツールである EPOSTL（European Portfolio for Student Teachers of Languages）を元に日本向けの翻案の作成に取り組んでいる。EPOSTL は Personal statement（個人履歴）、Self-assessment（自己評価）、Dossier（個人資料）の3部構成で、自己評価 Can-do 項目が中心となる。この項目は7分野にわたって193あり、それら段階的に検討して最新版の翻案では74項目となっている。現在、その74項目の妥当性について継続的に教育実習生に対してアンケート調査が進められているところである。また小林・大熊（2007：89）に示された授業力自己診断シートも参考になる。

た学生が多く見られた。

優れた教員は一朝一夕には育たない。教員を目指す学生も現職教員も共に自らの姿を見つめ次なる飛躍への手がかりを自覚することで、自律的成長へつながっていく。中森（2009：243）は「教師と学習者が出会い、ともに学ぶかけがえのない時間は、一生に一度しか与えられてはいない。外国語を獲得することは、厳しい努力の積み重ねではあるが、それを克服したときに英語の運用が可能となる。その喜びを学習者に伝えていくためにも、提供可能な最善の教育を展開することが、英語教育に携わる者の責務であると考え。」と述べている。研究大会などでよく見られる念入りに準備し舞台上で披露される公開授業ではなく、ここには日常の教師と生徒の学びの格闘がある。高校に届けられた学生による授業見学レポート冊子は同校で回覧され、英語科のみならず他教科でも同様に近隣大学の教員養成課程学生による授業見学の機会を探る動きもあった。このように現場の授業見学はよりよい教員をめざす学生とそれを提供する学校側・教員側の双方にとって互恵的で貴重な教育の場となっている。

参考文献

Davis, T. C. & Moely, B. (2007). Preparing pre-service teachers and meeting the diversity challenge through structured service-learning and field experiences in urban schools. In Townsend, T. & Bates, R. (eds.). *Handbook of teacher education: globalization, standards and professionalism in times of change*. Dordrecht: Springer.

八田玄二 (2000). 『リフレクティブ・アプローチによる英語教師の要請』 東京：金星堂

Hill, L. A. & Dobbyn, M. (1979). *A teacher training course*. London: Cassell Ltd.

JACET 教育問題研究会 (2005). 『新英語科教育の基礎と実践—授業力のさらなる向上を目指して』 東京：三修社

JACET 教育問題研究会 (研究代表者 神保尚武) (2010). 『英語教員の質的水準の向上を目指した養成・研修・評価・免許制度に関する総合的研究』 平成21年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 成果報告書 (19320086)

- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Smith, K. A. (1991). *Cooperative learning: increasing college faculty instructional productivity*. ASHE-ERIC Higher Education Report No.4. Washington, D.C.: The George Washington University, Graduate School of Education and Human Development.
- 河上亮一・高見茂・出口英樹編, 日本教育大学院大学監修 (2009). 『教員免許更新講習テキスト—教育現場のための理論と実践』 京都: 昭和堂
- 小林正幸・大熊雅士 (2007). 『現役教師が活用する仕事術』 東京: ぎょうせい
- 中森誉之 (2009). 『学びのための英語学習理論—つまづきの克服と指導への提案』 東京: ひつじ書房
- 野村和宏 (2007). 「英語教育法」授業実践事例と DVD 映像。大学英語教育学会授業学研究委員会編『高等教育における英語授業の研究—授業実践事例を中心に』 東京: 松柏社
- 野村和宏 (2008). 「映像を通じた自己観察による教師の気づきと成長」『教師の成長に寄与する外国語授業研究法の開発と重層的研究データベースの構築』平成17-19年度科学研究費補助金研究成果報告書 (17520390) 神戸市外国語大学
- 太田 洋 (2008). 「授業実践」『スペシャリストによる英語教育の理論と応用』 東京: 松柏社
- Richards, J. C. & Farrell, T. S. C. (2005). *Professional development for language teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 立田慶裕・今幸幸蔵 (2010). 『学校教員の現代的課題—教師力・学校力・実践力』 京都: 法律文化社
- Williams, M. (1989). A developmental view of classroom observations. In *ELT Journal* Vol. 43-2. Oxford: Oxford University Press.
- Wright, T. (2005). *Classroom management in language education*. London: Palgrave Macmillan.

Appendix 英語教員に求められる資質チェックリスト

	教員としての到達目標	教員をめざす学生としての現時点での評価
01	問題に対して柔軟に対応できる	身の回りの問題に対して柔軟に対応できる
02	明るい	明るい
03	落ち着きがある	落ち着きがある
04	プラス志向である	プラス志向である
05	好奇心が強い	好奇心が強い
06	教育に対する情熱と熱意がある	教育に対する情熱と熱意がある
07	他の教員と連携できる協調性がある	友達や周りの人と協調性がある
08	学習者のニーズが理解できる	友達や相手のニーズが理解できる
09	説明や指示が明確にできる	説明や指示が明確にできる
10	能力試験で一定レベルの英語力をもっている	能力試験で一定レベルの英語力をもっている
11	教室で英語を効果的に使用することができる	教室で用いる英語について意識して学んでいる
12	ALT と授業の打ち合わせや交渉ができる	ALT と授業の打ち合わせや交渉をするための英語表現を意識して学んでいる
13	生徒に発音の見本を示すことができる	正しい発音の知識を学び運用能力を高める努力をしている
14	種々の大学入試問題に対応できる	大学入試問題を意識して観察している
15	わかりやすい授業を展開することができる	わかりやすい授業がどのようなものか日常的にさまざまな授業を注意して観察している
16	自己表現活動の指導技術を持っている	自己表現活動の指導技術を高めることを意識している
17	効果的な音読指導ができる	日常的にできるだけ声に出して英語を読んでいる
18	英語の語学的知識がある	英語の語学的知識を意識して学んでいる
19	主な教授法・教授理論の知識がある	教授法・教授理論を理解しようとしている
20	学習指導要領についての知識がある	学習指導要領を意識して学んでいる
21	テストと評価方法についての知識がある	テストと評価方法について意識して学んでいる
22	日本語と英語の違いについての知識がある	日本語と英語の違いについて意識して学んでいる
23	異文化コミュニケーションの知識がある	異文化コミュニケーションについて意識して学んでいる
24	国際情勢に関する知識がある	国際情勢について意識して学んでいる
25	国際語としての英語の役割を認識している	国際語としての英語の役割を意識して学んでいる
26	英語圏文化の背景知識がある	英語圏文化の背景知識を意識して学んでいる
27	生徒の興味・関心を引く話題や特技をもっている	豊かな経験や趣味を持つように日常的に心がけている
28	十分大きい声で分かりやすく説明することができる	場に応じて声の大きさや話し方を意識している
29	黒板の文字が見やすく効果的に活用できる	分かりやすい黒板の使い方を意識して観察している
30	協同的、競争的、個別的学习をバランスよくできる	授業の中のさまざまな学習モードを意識している
31	教員として人間的な成長を常に心がける	教職をめざす者として人間的な成長を心がけている
32	常に自分の英語力に磨きをかける努力を怠らない	自分の英語力の弱点を認識し克服するため具体的な勉強に取り組んでいる
33	英語教授力を高めるために専門的知識を増やし指導技術を向上させる	授業での学びに加え学外の学会や研究会、講演会に参加したり、友達仲間勉強会を行ったりしている